



CENTER FOR TEACHING AND LEARNING

We have produced a bilingual FD Newsletter at ICU, and we take great pleasure in making it available on the internet.

And, just as we hope to contribute to Faculty Development outside ICU, we look forward to learning about efforts at other institutions in Japan and abroad. We look forward to these reciprocal efforts and, for now, thank you for your interest in our program.



目次:

- 1. センター長・副センター長からの挨拶2
- 2. セミナー研修レポート
 - Oxford EMI トレーニングプログラムの開催4
- 3. FD セミナー報告
 - 「発達障害のある学生に対する支援の在り方」8
- 4. 学修・教育支援
 - 学生支援事例データベース公開について10
- 5. コラム
 - CTL ウェブサイトリニューアル12
- 6. 編集後記15



CTL センター長・副センター長からの挨拶



小瀬 博之

学修・教育センター
センター長

今年度から学修・教育センターセンター長を拝命しました小瀬博之です。2014年に掲げられた CTL の設置目標に「学修・教育センターは、学生も教員も相談しやすく、必要な支援が受けられ、学修・教育の改善に参加できる場とする」とありますが、昨年(2018年)4月にオスマー図書館に移転して、学生との距離がより近くなりました。学生の間で認知度も上がり、困った時の駆け込み寺としても利用されています。一方、先生方も図書館の利用がてら立ち寄って下さるようになり、さまざまなご意見を Face to face で伺う機会も増えました。ICT 技術や Moodle の使い方、授業のビデオ収録など、教員の授業方針や各クラスの事情に合わせてアドバイスをさせて頂いています。また、技術的なことだけでなく、CTL では教員と本学の教育理念を共有しながら、授業目標達成のための支援をしたり、困難を抱えている学生を先生方と一緒に支援することも使命としています。学生の学修に関することはなんでも構いませんので、教員の駆け込み寺としても是非利用してください。

さて、教育理念の実現というお題目としては立派なのですが、CTL の実情は目前に迫り来る問題課題にいつも翻弄されています。例えば、TA 制度の運用について以前から種々問題点が指摘されてきました。ICU は日本の大学ではいち早く TA 制度を取り入れた先進性の高い大学なのに、どうも制度がうまく機能していないと言われてきたことを受けて、本来の TA 制度の主旨の実現を目的として来年度から改正 TA 制度が始まります。ここまで読んで「何がそんなに問題なんだろう」と思われた方もいるかと思います。TA 制度に限らず、重要案件は教授会などで報告されているのですが、解決方法が思いつかないというよりは問題それ自体が十分共有されていないことにもどかしさを感じる人が多いです。これには様々な理由があると思います。「関心がなくて問題意識が低い、理念を理解していない、古い考えに固執している、忙しい」そのような状況を嘆いているのではなく、問題提起や制度変更を通じて ICU というコミュニティの意識を変えていく

ことこそが問題解決の根底にある本質であると感じています。制度を変えることはある意味容易ですが、構成員の意識を変えていくことは地味な努力と時間、それに失敗を要します。ご批判を受けつつも「できるところから変えていく」という信念で CTL は制度やメソッドについて実情に合わせた改変を提案・実行していきますが、それらを通して教員コミュニティが問題を共有するきっかけになることを願っています。TA 制度の話に戻りますと、2014年に今の運用形態になって TA 任用計画の提出が義務化されました。これにより全ての教員と職員の負担は増え、多くの苦情を頂きました。煩雑な事務作業が増えたのだから当然だと思います。ですが、その不満を一步進めて、問題の本質について一緒に考えて頂きたいと思います。私たちはリベラルアーツを標榜する大学で教鞭をとる集団です。授業で学生にしばしば指導しているように、なぜこのような「改悪」が必要だったのか、批判的思考を用いて考え、ディスカッションをし、建設的な解決法について提案して頂きたいのです。教員全員が TA のあるべき役割を理解・共有し適切な運用ができていれば、任用計画など不要なはずですが、文理や分野の垣根なく学際的に学ぶことを推奨する本学の教員同士は他分野や考え方が異なる他者とよりよくダイアログができて、共通の問題解決に向けて行動できるはずである、というのは理想論過ぎるでしょうか。

英語での卒論執筆、ライティング、英語開講支援、アクティブラーニング・反転授業支援、障害学生支援、アカデミック・アドヴァイジングなど、それぞれに問題課題があります。CTL は問題解決や教育目標の達成のための環境づくりに知恵を絞って邁進しつつ、教職員の意識に働きかけるハブとしての役割を果たしていきたいと願っています。そのための第一歩として、学期に一度はオスマー図書館 1 階の CTL まで是非足をお運び下さい。





カレン, ベヴァリー F. M.

学修・教育センター
副センター長

2013年から社会・文化・メディア部門の翻訳教授を務めております。また、今年の4月から学修・教育センター（CTL）の副センター長も努めさせていただくことになりました。学修・教育センターでは、主に学生支援に焦点を当てています。IBS（ICU Brother and Sister：学生アドバイザー）やWSD（Writing Support Desk：ライティングサポートデスク）のように情報提供やアドバイスを学生が行うピアサポートや、様々な理由で学業生活が困難な学生をどのようにサポートするかという特別支援などについて学んでいます。CTLの一環として、学内全体の学生サポートとその運用方法について考えるのは興味深いです。

他のメディア・コミュニケーション・文化メジャー教員同様、私も大規模なクラスをよく教えています。ICUの学生の多くは言語学的アイデンティティや文化的アイデンティティを探求し、プロセスとプラクティス、そしてプロダクトとして翻訳について学ぶことに興味を持っているようです。村上春樹は、優れた翻訳者になるには情熱が



必要だと言っていますが、これは教育と学習にも当てはまると思います。時にはこの情熱をどのように生み出すのかということが課題になり、だからこそコミュニケーションとコラボレーションが重要になります。教職員の方々やピアサポーターの皆様の知識や経験を共有できる場に参加できることを、非常に嬉しく思っています。

研究内容および執筆物についての最近の出版物は Alexander Hinton、Giorgio Shani、および Jeremiah Alberg 編集の『*Rethinking Peace: Discourse, Memory, Translation and Dialogue*』の章、「A Translational Comics Text and its Translation: *Maus* in Japanese」があります。また、Mitsuko Ohnoさんと共同で英訳した Sasaki Mikiro 著の詩、『*Sky Navigation Homeward: new and selected poems*』も、今月 Dedalus Press から出版されました。現在は、翻訳の知識を教えることについて、さらに研究を深めています。今回の着任は、授業を超えた観点から教育を見直す良い機会を提供してくれると感じています。

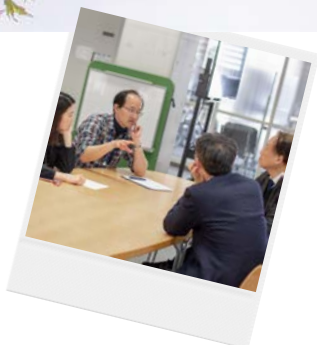
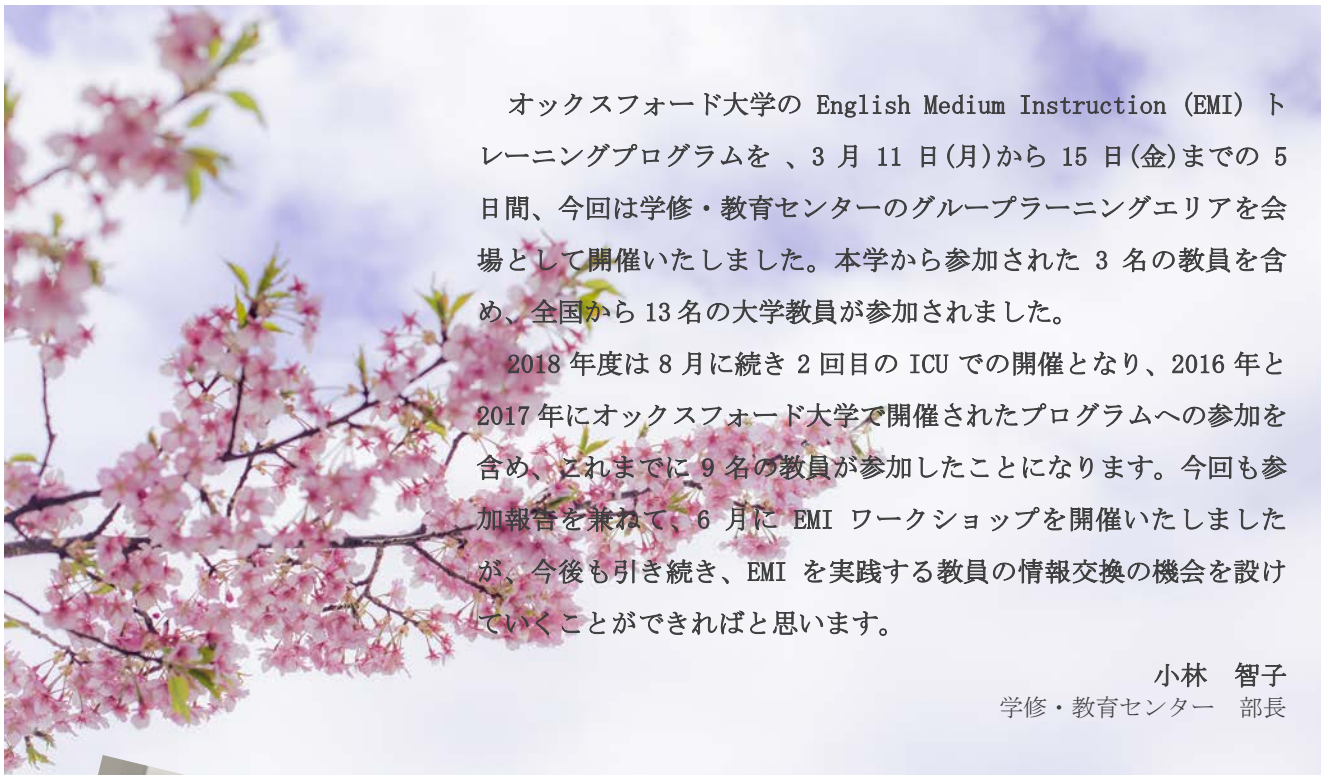


Oxford EMI トレーニングプログラムの開催

オックスフォード大学の English Medium Instruction (EMI) トレーニングプログラムを、3月11日(月)から15日(金)までの5日間、今回は学修・教育センターのグループラーニングエリアを会場として開催いたしました。本学から参加された3名の教員を含め、全国から13名の大学教員が参加されました。

2018年度は8月に続き2回目のICUでの開催となり、2016年と2017年にオックスフォード大学で開催されたプログラムへの参加を含め、これまでに9名の教員が参加したことになります。今回も参加報告を兼ねて、6月にEMIワークショップを開催いたしました。今後も引き続き、EMIを実践する教員の情報交換の機会を設けていくことができればと思います。

小林 智子
学修・教育センター 部長



藤沼 良典
自然科学部門



3月第2週にオックスフォードEMIというFDコースを受講しました。受講した動機は三つ、イギリスの今のアクティブラーニングはどうなんだろう、日本の他のファカルティはどのようなやり方をしているのだろうか、そして英語がネイティブでない学生に英語でわかりやすく教える方法はあるだろうか、でした。

受講した感想は、と言われると1週間の短期集中講座だったのですが終わってみるともう2、3日長くてもよかったと思えるほどに得るものが多い講座でした。また、学期中は他の先生方の教えている現場を見る機会や自分の教え方がどう捉えられているのかを知る機会は少ないため、講師の先生方や一緒に受講した先生方から授業の進め方の貴重な情報を得られたことは自分の授業でアクテ

ィブラーニングをさせるための自分のアクションラーニングに有意義に繋がりました。講座を通して見ることでできた諸先生方のアクティブラーニングの進め方はどれも楽しく、かつ学生によく考えさせるやり方で本当に教え方とは多様であるということに再認識しました。また同時に参加された色々な専門分野の先生方との交流を通して皆似たようなところで苦労していることもわかりました。単純な私には皆も試行錯誤しているのだと思うとすこし気が楽になりました。

さて今回の講座で私にとって一番大きな収穫は何であったかと言うと、英語をどのように使うことがネイティブでない学生にもわかりやすくなるか、でした。今までは学生がわかっていないときにできるだけ平易な単語を使って言い換えていた

のですが、それは逆効果で余計にこんがらがらせてしまうことなど、実践的なポイントが多くて自分の授業のやり方を見直す良い点となりました。

新年度となり今学期教えている授業の中で EMI で学んだことを少しづつ、できる範囲で取りいれています。学生が自発的に楽しく、でもクリティカルに考えて行動できる、そんな授業ができることを目指してこれからも頑張っていける道が少し見えた気がします。

もし、このオックスフォード EMI を受講したことがない方がいれば、受講されることを強くお勧めします。この経験は学生も自分も楽しめる教育効果の高い講義をどう構築していくかを見つける良い機会になります。



石橋 圭介

自然科学部門

この度 Oxford EMI トレーニングコースで研修を受けました。私は英語開講の経験がなく、英語スキルに不安を持ちながらの受講になりました。しかし、コース冒頭に、先生から EMI は English の講義ではなく、English を media とした content の講義であり、従って EMI トレーニングの目的は受講者の英語スキル向上ではなく、学生の言語バリアがある状況で、content を効果的に講義する手法の講義であるという旨の紹介があり、意識を改めることになりました。

講義形式は EMI トレーニングコース自体を EMI で実施するという形式であり、(私の場合は)言語バリアがある学生の立場に立つことが出来たように思います。講義内容としては、アクティブラーニングに関する実践的な技法、例えば IRF (Initiation Response Feedback)、TPS (Think Pair Share)、2/3 rule、HOT (Higher Order Thinking) などが紹介されました。これら技法の効果を学生の立場で体感することが出来ました。

これらアクティブラーニングの各種技法の有効性



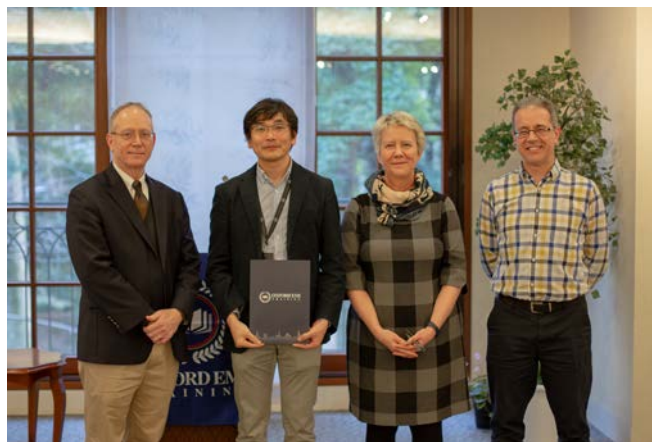
や必要性は講義の種類にも依存すると思います。ただ根底にある課題意識は、学生の言語バリアがある状況下で、講義内容の絞り込みやアクティブラーニングなどの工夫によって、如何に授業効果の低下を最小化するかというものであり、この課題意識および対策自体は普遍的なものであると感じました。例えば、日本語開講の授業であっても留学生や帰国子女で JLP 受講中の学生に対して同

様の課題意識を持つべきであり、さらには母国語の学生であっても、言語バリアは多かれ少なかれ存在し、EMI の考え方は有用かと思われました。現在、私の授業は日本語開講ではありますが、これらの考え方を少しずつ取り入れていきたいと思っています。

ただし、他大学から来られた受講者の先生からも意見があったのですが、やはり **English Medium** にすることによる授業効果低下の懸念はあるものと思います。途中、招待セッションとして明治大学、早稲田大学の EMI を推進していらっしゃる先生方から各大学での EMI の取り組みや課題の紹介、さらに本学卒業生で現在 Oxford 大学博士課程で EMI の授業効果に関する研究を進めていらっしゃる相沢さんからご自身研究紹介がありました。これらの取り組み共有や研究によって、改めて EMI の意義と課

題が明らかになり、どのように EMI を進めていくべきかの議論が深まるものと思います。

今回は貴重な機会をいただきありがとうございました。



八木 啓太

リベラルアーツ英語プログラム

EMI のコースは、理論と実践の両方をバランスよく学ぶことができた非常に満足度の高い研修でした。

まず、理論的なことで印象に残っているのは、初日の EMI に関する研究結果に関する講義です。学生の母語を使用するのではなく、英語を使用する EMI の授業で、多くの人が抱く「学習の質が低下するのではないか」という疑問に対して、EMI がきちんと実践されれば学習の質は下がらず、む

しろ向上するという結果には驚きました。その条件として、EMI の授業では、(1) 教員自身の英語をできるだけわかりやすくすること、(2) 一方的に教員が講義をするのではなく、TPS (Think-Pair-Share) というテクニック等を用いて学生が講義の途中でペアで少し話し合う時間を設けること、(3) 学生が内容を理解しているか、教員が把握する方法を事前に考えておくことなどがありました。(3) に関しては ELA でそれぞれのコースに設定している、学習成果 (Learning Outcomes) と学習成果指標 (Learning Outcomes Indicators) と重なる部分があると感じましたが、大人数の授業で学生の理解度を測る Socratic というアプリを紹介していただいたことはとても有益でした。

実践的なことで一番役に立ったことは、最終日に自分の専門とは違う専門の先生とペアになって行う 15 分間の模擬授業です。この模擬授業では、5 日間で学んだことを実践する良い機会でした。私とペアになった先生のご専門が日本文学でしたので、二人で「日本文学と文学賞」について授業を組み立て、ペアワークやグループワークを行うた

めの教材を作成し、このコースで学んだ (1) - (3) を取り入れた授業を行いました。模擬授業を通して実感したのは、EMI や内容言語統合型学習 (CLIL) の授業も、工夫をすれば、学生中心の授業スタイルで行うことができる、ということでした。

この研修は、他大学の英語教育が専門の先生方や、物理や法律など、様々なご専門の先生方と交流を深めることができただけでなく、普段なかなかお話しする機会がない CLA の先生方ともお知り合いになれた素晴らしい機会でもありました。このような機会を与えてくださったオルバーグ先生と CTL のスタッフの方々に、深く感謝致します。



関連URL

- ◇<https://emi.info.icu.ac.jp/>
- ◇<https://oxfordemi.co.uk/MarchICU2019>

EMI に関する過去の記事 (FD Newsletter)

- ◆OXFORD EMI トレーニングプログラムの開催 [FD Newsletter Vol. 23 No. 2](#)
- ◆峰島知芳 先生 [FD Newsletter Vol. 22, no. 2](#)
- ◆金子拓也 先生 [FD Newsletter Vol. 22, no. 1](#)

「発達障害の学生に対する支援の在り方」

講師：西村優紀美先生（富山大学保険管理センター 准教授、富山大学教育・学生支援機構 学生支援センター副センター長）

日時：2019年2月8日(金)12:45～13:45

会場：ダイアログハウス 2F 国際会議室

杉田 瑞枝

学修・教育センター
特別学修支援室

今回のFDセミナーでは富山大学の西村優紀美先生をお招きし、「発達障害のある学生に対する支援の在り方」というテーマでご講演いただいた。

セミナーの前半では、発達障害の特性を持つ学生が、大学生活でどのようなことに困るのか、またどのような支援の方法があるのかについて具体例を含めながら話していただいた。その中でも特徴的だったのは、富山大学で実践されているチーム型の支援方法であった。障害学生支援室が学生とその家族への面談や個別支援をしていることは本学と同じであるが、富山大学ではさらに『ハブとなる教員』を決め、授業担当教員と学生本人、家族、障害学生支援室と協力して支援を行っている。さらに、教員間では日常的な出来事・問題点、合理的配慮、新たに必要となる配慮の情報等を共有し、その情報を障害学生支援室とも学期ごとに共有をして今後に向けた対応策などを検討しているとのことだった。

本学では特別学修支援室と各授業担当教員が情報共有をして支援を行っているが、担当教員間の情報交換はあまり行われておらず、教員各々への負担が大きくなってしまっていることも事実である。本学でもこのようなチーム型支援が可能になれば、教員個々人の負担を減らしつつより教育の実情に沿った支援ができるようになるのではないと思われる。

また、富山大学ではチームでサポートする方法は、より多くの教員に障害学生支援のプロセス等を理解を深めるのに有効な方法と考え、実践しているとのことであった。

セミナーの後半では発達障害学生への面談の意義についてお話いただいた。その中で強調されていたのは『対話』の重要性についてであった。なぜ対話を重視しているかという、学生と支援者との面談は、ある時は『体験を時系列に沿って語る場』であり、またある時は『一つのトピックに絞って語る場』となり、『対処法を検討する場』

になるからである。特に診断を受けて間もない学生の場合、自分に何ができて何を支援要請すればよいのか分かっていないことが多い。発達障害の特性はどこからが障害で、どこからが障害でないのか分かりにくい。努力すれば他の人と同じようにできるようになると思いがばっってきた学生にとって、自己理解に至るまでには時間がかかる。このため、対話をすることで学生自身が自分の考えを自分の意思として自覚し、それを表明する場を提供することが可能になるとのことだった。

また、社会学や心理学の視点から見ると、『自己』は自分自身について物語ることを通じて産み出される。自分の経験を意識し、自身の内的世界に位置づけるには、その経験を他者に承認してもらい共有してもらう必要がある。つまり、自己物語が社会性を獲得するには他者との語りが必要である。このため、富山大学では学生との対話を最も大切なものとして位置づけていると同時に、学生と支援者との対話そのものが、コミュニケーション支援の場として機能しているという自覚を持ちながらこれまで支援を展開されてきたとのことだった。

発達障害

- 限局性学習症/限局性学習障害:
(Specific Learning Disorder :SLD)
学習能力の凸凹
- 注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害:
(Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder: ADHD)
集中力や行動上の特性
- 自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害:
(Autism Spectrum Disorder :ASD)
コミュニケーションの質的違い
- 発達性協調運動症/発達性協調運動障害:
(Developmental Coordination Disorder :DCD)
粗大運動・微細運動の困難さ

本学の特別学修支援室を利用している学生でも、どのような支援を希望しているかと聞くと、「今まで支援を受けたことがないので、どのような支援があれば自分が助かるのか分からない」「支援を求めるのは甘えなのか正当な要求なのか分からない」などといった声がよく聞かれる。このような学生には、どのようなことに困っているのか、どのようなことが得意なのか、またこれまでの生活の中で自分が工夫してきたことなどの話を聞いた上で支援例を提示し、試行錯誤をしながら合理的配慮の内容を決めていく作業を行っている。これも西村先生が言われていた『対話』であり、学生が『自己物語』を語る場として機能しているのではないかと思うが、このような『対話』は支援室スタッフだけでなく他の教職員とも共有されることでよりよい効果を生み出すのではないだろうか。

現在、障害学生支援で課題となっているものの一つに就労移行支援がある。就労の際も自分の特性や必要な配慮を知っているということが重要に

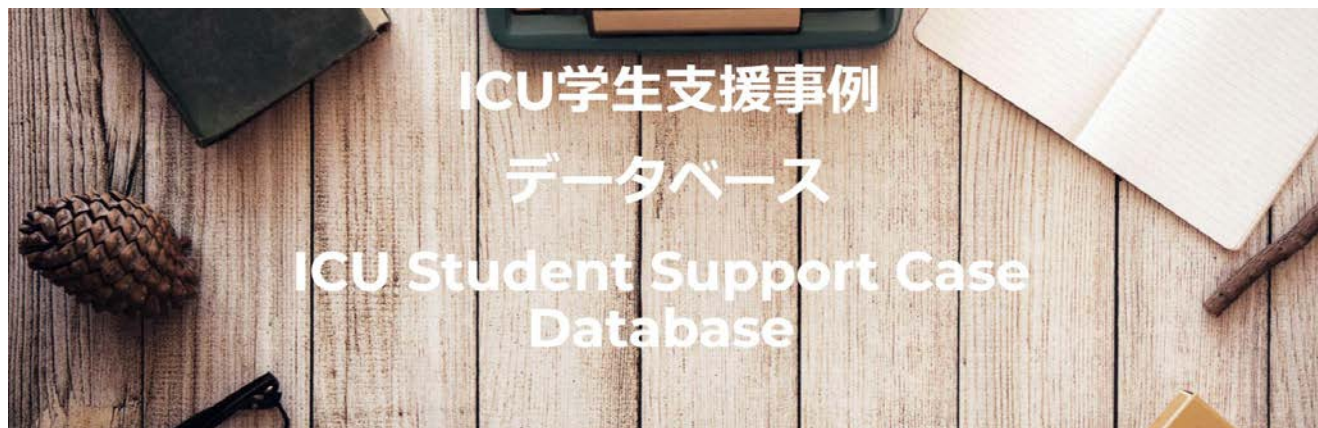
なってくる。修学に対する支援のためだけでなく、卒業後の社会生活を円滑にスタートさせるためにも、学生時代により多くの人との『対話』を経験しておくことは学生にとって貴重な財産になるのではないかと感じた。

※FD セミナーの講演映像は icuTV で公開されています。

<https://sites.google.com/a/icu.ac.jp/icutv/fd-seminar/fdseminar-20190208>



学生支援事例データベース公開について



SNSS では、教職員の協力の下に 2018 年 3 月に事例収集を開始し、学生支援事例データベースを 2019 年の 2 月に公開した（教職員限定公開）。現在 11 事例を掲載している。

番園 寛也

学修・教育センター
特別学修支援室

データベース作成の経緯と目的

かねてより ICU での学生支援の優良事例を学内で共有したらどうかということが話題に上っていたが、本データベースを立ち上げる直接のきっかけは 2017 年にマサチューセッツ州立大学ボストン校地域インクルージョン研究所主催「日本の高等教育機関における障害学生支援に係るリーダー育成海外研修」（[FD Newsletter, vol.23, no.1](#) に報告記事掲載）に参加したことだった。

この研修の中で、Tufts 大学の Student Accessibility Services (SAS) のディレクターである Kirsten T. Behling 氏より大学内の UDL（学びのユニバーサルデザイン）を現実的に進めていくための方略についての講義があり、すでに学内でなされている UDL 的な取り組みを見出すことと、完全な状態を目指すのではなく今あるものに一つ付け加える“Plus-one”アプローチの重要性が強調されており、大きなヒントとなった。

ICU では研修参加時点までに、合理的配慮を提供するための体制はある程度整いつつあり、教職員の経験も一定程度蓄積されていた。しかし、より有効で効率的な学修支援を考えるといくつかの課題も認識していた。授業などでより効果的な合理的配慮を考える上では、教育の目的や意図を深く理解している教員の主体的な取り組みがなければ消極的な（最低限のニーズは満たせるが、十分

に教育的効果が得られない）解決で終わってしまうこともある。また、障害学生に個別の合理的配慮を提供するだけでなく、多様な学生にとってなるべくアクセシブルな環境を準備しておく UDL（Universal Design for Learning）を推進していく必要も感じていた。

それと同時に障害学生支援部署の職員として、個別の学生に対する支援を他の教職員と協力して実施する中で、教員やプログラムごとに独自の支援の取り組みがなされているのも実際に見ており、そうしたものを発見し共有することで、大学全体の障害学生支援の向上につながるのではないかという認識から事例収集を開始し、データベースとして公開するに至った。

データベースの特徴

本データベースでは、教職員から寄せられた支援事例を学生個人が特定されないようにした上で、探しやすいように事例ごとに特徴を現す名前をつけてある（例：「視覚障がいのある学生（点字使用）の理系科目履修」「ディスレクシアのある学生の語学科目」）。データベース上では、障害種別、支援が必要とされた場面（授業、アドヴァイジング）、実際に行った対応、対応の中でうまくいった点・うまくいかなかった点などを掲載している。新たに支援を行う必要が出てきた際

に、状況と近いものや、状況は異なってもヒントとなる事例があるかもしれないので、ぜひご活用いただければと思う。また、支援を経験された教職員の方々にも、経験の中で得られた気づきを ICU 全体の共有財産とするために引き続き事例の入力にご協力をお願いしたい。

現状では全ての事例を一覧できるリスト形式にしてあるが、今後、事例数が増えていけば、分類やタグづけなど検索性を向上させる工夫を取り入れたいと考えている。

今後の展開

本データベースに関しては、事例の収集段階より複数の教員からフィードバックや感想などが届き、公開後の反響も大きい。現在は継続した事例の収集と、入力フォームだけでは拾えない事例を個別インタビューなどの形式によって盛り込み、より有益なデータベースを作るための取り組みを進めている。

また、このデータベースを教職員により積極的に活用してもらうための方法や研修などでの活用する方法についても検討を行っている。

読者の皆さんが本データベースを実際に使用される中で感じたこと、気づいたことがあれば、SNSS までぜひお寄せいただきたい。

[*学生支援事例データベース](#) (教職員限定公開)

[*学生支援事例入力フォーム](#) (教職員限定公開)

CTL ウェブサイトリニューアル



一澤 真紀

学修・教育センター

今回は 2018 年 9 月にリニューアルした CTL ウェブサイトについて紹介したいと思います。学修・教育センター (CTL) は 2015 年 4 月に開設され、2015 年 11 月には新たに CTL のウェブサイトを開設し情報発信を行ってきましたが、以下のような背景から、ウェブサイトをリニューアルすることとなりました。

1) Google サイトの仕様変更

学内で比較的自由に利用可能なツールが Google のサービスだったこともあり、最初のウェブサイトは Google のサービスのひとつである Google サイトを利用して作成しました。しかし、サイトの作成、公開後に [Google サイトの仕様が大きく変更](#) されることが決まり、そのままサイトを利用し続けることが難しい状況となっていました。

2) 中国からのアクセス

本学は使命の一つである国際化、さらには入試制度の多様化などに伴い、アジア圏からの入学生も近年増加傾向にあります。Google のサービス全般が中国国内から利用できないという問題があり、これを解消する必要がありました。

3) 学内他部署での部署ウェブサイト作成ニーズ

大学全体のペーパーレス化推進等もあり、ウェブサイトによる情報発信のニーズは年々高まっていますが、一方で新しくウェブサイトを作成する

にあたり、業者選定やサイトデザインの作成などをそれぞれの部署で別々に行っていたため、費用対効果、作業効率ともに悪く、またデザインの統一感がなくなる、などの問題が浮上していました。

4) サイト構成、コンテンツの複雑化

CTL の業務内容は幅広く、更に新しい試みも多いため、その都度コンテンツを増加させていった結果、サイトの構成が複雑になり、なかなか必要な情報にたどり着けず、利用する側にとっての利便性が低下していました。また、管理する側にとってもコンテンツの場所がわからなくなる、などの問題が起きていました。

5) スマートフォン対応

以前の CTL ウェブサイトはスマートフォンでの表示に対応していなかったため、スマートフォンをはじめとする様々な端末での表示を見やすくする必要がありました。

新ウェブサイト作成までの経緯

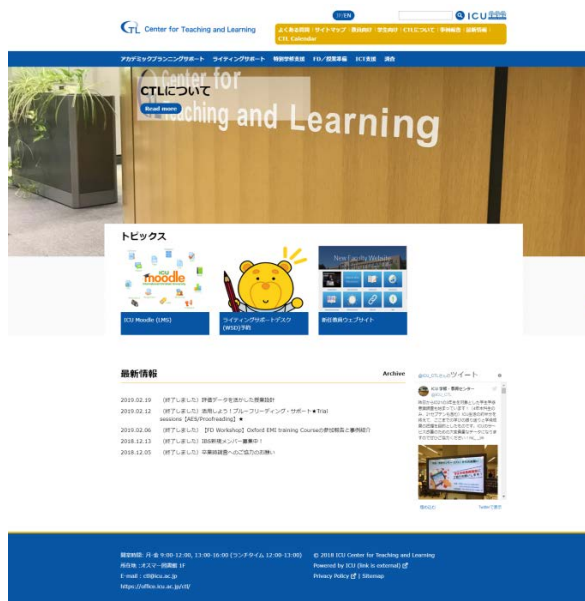
上記のような問題を解決するために、2017 年秋頃に CTL ウェブサイトをリニューアルすることを提案しました。新たにウェブサイト用に専用のサーバーを利用することとして、サーバーの管理・運用は学内の専門部署に依頼することにしましたが、他の部署でも新たな部署用ウェブサイトの作

成を検討しているところが多いことを踏まえて、学内の部署全体で使用可能なテンプレートを Movable Type (コンテンツ管理システム: CMS) で作成することとし、テンプレートのデザインを CTL で行いました。新しくなった CTL ウェブサイトの内容については後述します。

作成したテンプレートは、管理・運用を行う部署経由で、学内の他部署にも徐々に展開しているところです。サイト更新には、HTML に関する特別な知識は必要なく、テキストエディタを編集する感覚でコンテンツを作成することができるようになり、デザインにも統一感が出るようになりました。利用者にとっては、スマートフォンなどの様々な端末の画面サイズに合わせて表示が自動で最適化されるようになり、また中国からのアクセスに関する問題も解消され、国内外どこからでも閲覧可能となりました。

参考までに現在、部署用ウェブサイトのテンプレートを使用して作成、公開しているウェブサイトは以下の通りです。

[サービス・ラーニング・センター](#)
[国際交流室](#)
[アドヴァンスメント・オフィス](#)



新しい CTL ウェブサイトトップページ

新 CTL ウェブサイトの特徴

新しい CTL ウェブサイトの特徴 (以前のサイトからの変更点) は主に以下の通りです。

- ・スマートフォンなどに対応。
- ・日英両語対応 ([ICU オフィシャルサイト](#)と同様に日本語がメイン)

- ・階層は最大 4 階層まで。メインのコンテンツはできるだけ 3 階層以内に配置。(3 階層以内にすれば、トップページメニューから直接アクセスできる)
- ・これまで掲載していた情報を業務ごとに整理、また、アカデミックプランニングサポート (APS)、ライディングサポートデスク (WSD)、特別学修支援 (SNSS)、FD ニュースレターなど、これまで別サイト、別レイアウトで作成していたサイトを、全て新しい CTL ウェブサイトに統合。
- ・「[最新情報](#)」(ニュース) ブログ、「[事例報告](#)」ブログ (CTL のリソース、ツール、サポート事例などを掲載) を作成。
- ・いろんなページに点在していた様々なリンクを可能な範囲で[教員向け](#)、[学生向け](#)リンク集ページに集約。
- ・「[よくある質問](#)」(FAQ) のページを作成。

トップページ

トップページの特徴は以下の通りです。

- ・メインビジュアル: トップページ上部に画像または動画を掲載する場所を設置。画像は複数設定でき、自動的に表示が入れ替わる。
- ・トピックス: メインビジュアル下に配置される最大 4 つの画像付きリンク。特に強調したいコンテンツなどを掲載。
- ・最新情報: 最新のお知らせなどのニュースの見出しを表示。アーカイブページからは過去の記事が全て見られるようになっている。
- ・ツイッター: CTL のツイッターアカウントを表示。
- ・エクストラメニュー: 右上に表示されるリンクで、よくある質問、サイトマップ、リンク集 (教員向け、学生向け)、CTL について、事例報告などへのリンクを表示。

各メニュー

CTL の業務は大きく学修支援、教育支援、ICT 支援、調査に分けることができますが、CTL ウェブサイトのメニュー上では、各ページへのアクセスのしやすさも考慮して、現時点では以下のような構成となっています。現在 CTL で行っている業務を俯瞰することができますので、CTL の主な業務の説明も兼ねて、以下紹介します。

(学修支援)

[アカデミックプランニングサポート](#)

アカデミックプランニングサポートでは学部生の履修やメジャー選択など、学びに関する幅広い

相談に応じています。また、新入生オリエンテーション期間中のメジャーに関する情報提供のサポートなども行っている。また、[ICU Brothers & Sisters](#)、通称 IBS と呼ばれる学生アドヴァイザー団体の管理、運営も行っています。

[ライティングサポート](#)

ライティングサポートでは、学生の授業課題やレポート、論文作成などにおけるライティング能力向上のためのサポートを行っています。現在は[ライティングサポートデスク \(WSD\)](#)、[チュートリアルサポート](#)、[プルーフリーディング \(Academic English Support\)](#)の3種類のサポートを提供しており、利用学生はニーズに応じてそれぞれのサポートを受けることができます。

[特別学修支援](#)

特別学修支援では身体障がい（肢体不自由・視覚障がい・ろう/難聴）、学習障がい、発達障がい、精神障がいのある学生に合理的配慮を提供しています。また、学生、教職員、関連部署等と連携してユニバーサルな学修環境整備のための啓発活動も行っています。

FD/授業準備（教育支援）

[New Faculty Development Program](#)

New Faculty Development Program は新任教員を対象に、初年度に1学期間かけて実施するプログラムです。教育・研究を始めとするICUでの様々な活動にスムーズに適応することを目的としています。

[シラバス作成のためのガイドライン](#)

教員によるシラバスの作成をサポートするため、作成のためのガイドライン、入力方法、参考リンクなどの情報を提供しています。

[FD ニュースレター](#)

FD 活動の一つとして年に2回FD ニュースレターを発行していて、FD、教育支援や学修支援、ICT ツールの活用、新任教員の紹介など、CTL や教職員の様々な活動を紹介しています。

[教員ハンドブック](#)

教員ハンドブックはCTL サイトとは別に作成されている、主にICUの教員を対象とした、事務手続きや教育支援などの情報をまとめたウェブサイトです。

[ICT 支援](#)

授業などでのMoodle や Google Classroom (ICU で利用できるLMS(学習管理システム: Learning Management System)) の活用、反転授業用コンテンツの作成サポート、ICU OpenCourseWare の授業動画収録、編集、公開、ICU-TV (学内動画公開用

サイト) の管理運営などをICT 支援として行っています。また、デジタルコンテンツをウェブサイト等に掲載する際に配慮する必要がある、著作物の教材利用に関する情報も掲載しています。

[調査](#)

教育・サービスの質改善につなげるため、学生を対象とした調査の実施、分析等を行っています。現在は、学生が各授業の評価を行う授業効果調査 (Teaching Effectiveness Survey (TES))、第3学年を対象とした学生学修意識調査、卒業予定者を対象とした卒業時調査を実施しています。

今後へ向けた課題

今後の課題としては、日本語ページに対応する英語ページの作成は翻訳が必要となるため、作成が遅れてしまうことや、今後コンテンツが増えてきた場合、改めてサイト構成の見直しを行う必要が出てくる、などが考えられます。

ぜひ新しいCTL ウェブサイトをご覧ください、ご意見、ご感想などあればお寄せください。

編集後記

2019年度最初の号をお届けします。ご寄稿いただいた皆さまありがとうございました。

今号を含め、数号続けてオックスフォード EMI トレーニングプログラムの記事が掲載されています。2016年度、2017年度とイギリスのオックスフォードに1名ずつ教員を派遣しましたが、2018年度は開催場所をICUとし同様のプログラムを開催いたしました。準備は大変でしたが、自校開催のメリットを活かし、2018年8月には4名、2019年3月には3名の教員に参加していただくことができました。学修・教育の改善を目指したFDプログラムとして学修・教育センターが取組んだ Good Practice のひとつです。

2014年に開所した学修・教育センターは、2019年4月で4年目となりましたが、課題は常に山積みです。新たな取組みが成果をだすこともありますが、途中で見直しを迫られることもあります。そうした試行錯誤のなか、「変えるべきこと」「変えないこと」「変えられないこと」を意識し、途中のプロセスを大切に次のステップにつなげられるよう新たなセンター長、副センター長のもとで取組んでいきたいと思っています。

最後までお読みいただきました皆様、記事についてのご意見ご感想などがありましたら、お気軽に ctl@icu.ac.jp までお寄せください。

南 和子
学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

Othmer Library 1F 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422) 33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp
